

連携士が考える地域医療介護福祉連携とは～」をテーマに6名の先生方にご登壇いただきました。医療と介護の連携の推進が求められる中、日本医療マネジメント学会が2010年から養成している、医療福祉分野の連携・調整のエキスパート(医療福祉連携士)が考える医療介護福祉連携について、それぞれの立場から意見交換されました。また、医療福祉連携士養成のための「医療福祉連携講習会」の内容が説明され、それによって得られる知識や経験、全国に展開される人との繋がり等の素晴らしさが紹介されました。

シンポジウム10では「臨床指標の運用について」をテーマに5名の先生方にご登壇いただきました。国立病院機構における臨床指標の開発と運用について、国立大学病院における医療安全指標の開発とその運用についてご紹介いただきました。特に医療の質の改善活動のための臨床指標の活用は有用であることをそれぞれの施設の事例を示し報告されました。

シンポジウム11では「新興再興感染症に対する備え」をテーマに4名の先生方にご登壇いただきました。次のパンデミックへの病院の備えについての話を皮切りに、ダニ媒介性ウイルス性出血熱、重症熱性血小板減少症候群の発見と治療・予防法の話、昆虫媒介感染症とその対策について、最後にエムボックス(旧サル痘)の世界の現状について、貴重な講演をいただきました。今後の備えに生かして行きたいと考えます。

シンポジウム12では「災害医療マネジメントの変遷」をテーマに4名の先生方にご登壇いただきました。災害医療体制マネジメントはこれまでの災害時の活動より、都道府県、災害拠点病院に本部を設置し、医療機関等の被害状況を集約することを通じて、災害医療体制を確立する。被害状況の集約を通じて支援のニーズを正確に聞き取り、分析する。このことにより、医療機関等の混乱を防ぎ、現有資源で最大のパフォーマンスができる体制を確保する。その上で、物資支援調整、搬送支援、診療支援を実施する。これこそがDMATの基本活動であると整理されました。

シンポジウム13では「特定行為研修修了者の活動を推進するためには」をテーマに4名の先生方にご登壇いただきました。急性期病院看護管理者、病院長、ケアミックス病院看護師、在宅看護管理者、それぞれの立場から特定行為研修修了者の活動の現状や推進に向けた新たな取組、問題点についてご発表いただき、参加者と活発なディスカッションが行われました。

シンポジウム14では「人生の最終段階における意思決定支援～医療・ケアのあり方～」をテーマに4名の先

生方にご登壇いただきました。それぞれ医師の立場、救急の現場や認知症といった慢性期の患者を扱う看護師の立場、介護支援専門員の立場からアドバンス・ケア・プランニング(ACP)について発表がありました。ACPの問題点と適切なACPに向けたそれぞれの立場をつなぐ協調の重要性が改めて認識されました。

シンポジウム15では「医療情報ネットワーク(EHR)」をテーマに3名の先生方にご登壇いただきました。今後、地域医療の中で電子化した診療情報の活用はますます活発化されるものと考えられます。一方、全国医療情報プラットフォームが構築されつつあり、地域医療連携ネットワークとの機能重複が課題となっています。地域医療連携における診療情報共有の拡充と活用促進は地域医療・福祉の質の向上に必須であることが確認されました。

シンポジウム16では「在宅医療における地域連携・薬業連携」をテーマに5名の先生方にご登壇いただきました。在宅医療における現状と今後のあり方について、在宅の現場で活躍している薬剤師や後方支援にあたる薬剤師等で情報を共有できました。地域における薬局と福祉の連携について方向性を確認できました。

7月19日(土)閉会式終了後には市民公開講座を開催いたしました。仙台市在住の元サッカー日本女子代表の澤 穂希さんに「夢は見るものではなく叶えるもの」というテーマで講演いただきました。2011年FIFA女子ワールドカップドイツ大会でキャプテンとしてなでしこジャパンの優勝に貢献し、大会MVP、得点王に輝き、帰国後になでしこジャパンは「国民栄誉賞」を受賞しています。当時のこと、チームメイトのことをフランクにお話しいただきました。さらに、現在は1児の母として子育てしながらスポーツの普及のため様々な活動をなさっていることを紹介いただきました。地元高校



市民公開講座